

お寶の島

小川 未明

春のあたゝかな日でありました。正ちゃんも、ちい子ちゃんが、草の芽を摘みながら、遊んでゐました。

「あ、面白いことをしようよ」と、正ちゃんは、原っぱに積んであつた、砂を袋へ入れて、往來の上に運びました。するこ、ちい子ちゃんも、いつしよになつて、自分の袋の中へ砂を入れて、後からついて來ました。二人は、同じやうなことを幾度もくりかへすうちに、いつか道の上に小さな砂山が出來ました。正ちゃんは、考へてゐましたが、

「ちい子ちゃんも、何か持つておいでよ」と、いつて、自分は、お家へ行つて、椿の花も、桃の枝を折つて來ました。そして、それを山の上へ差しました。それから、小石を拾つて來て、お城のやうに、山を圍みま

した。

ちい子ちゃんは、お人形とおまんここの道具を持つて來ました。そして、それをお山の上へ竝べました。

「ちい子ちゃん、こゝに待つていらつしやい」と、お留守を頼んで、正ちゃんは、またお家へ飛んで行く

ミ、タンクミゴム鐵砲を持つて來ました。正ちやんは、それを、ちやうきお人形の立つてゐる、頭の上へ置いたのです。

たちまち、山は、いろくゝのもので、いつばいに飾られました。二人は、赤い林檎のやうな頬に、星のやうな腫をかゞやかしながら、これをながめて、さもうれしさうでありました。

ここからか、白いてふてふが、風に送られて來て、椿の花に止ろうとしたが、光つたタンクを見てびつくりして、逃げ去つてしまひました。

「ほほほ、馬鹿ね、なんにもしないのに」ミ、ちい子ちやんが、いひました。

「ほんたうのタンクミ思つたんだよ」

正ちやんは、泥だらけの手をエプロンで擦りながら、雲を見てぼんやりしてゐるミ、あちらから、頭の禿げたお爺さんが、ニコニコ笑ひながら、やつて來ました。

ちい子ちやんは、

「なんだか變なお爺さんね」ミ、いはぬばかりに、道端へ寄つて見てゐましたが、正ちやんは、

「おぢいさん、何がをかしいのだい」ミ、いひたげな顔付をして、見上げてゐました。

お爺さんは、お山の前まで來るミ、

「お、出來たな。これは、これは、立派だ。また、あミで、ゆつくり見せてもらふから」ミ、いつて、一

人で、ニコニコして、行つてしまひました。春の日が、お爺さんの禿げに、てらくミ照り返つてゐました。

「面白いお爺さんだな」ミ、正ちゃんは、お爺さんを見送りました。

「いゝお爺さんだわ」ミ、ちい子ちゃんは、思ひました。

二人は、自分達の造つたお山を、この知らないお爺さんに褒められたので、うれしくてたまらなかつたのです。

「ちい子ちゃん、もつミ、なんか持つておいでよ」

正ちゃんは、花や、お人形や、タンクや、庖丁や、いろくものもので飾られた、お山に見送られてゐました。

「もう私、色紙ミ、繪本しか持つてゐないわ」色紙で旗を造るから、早く持つておいでよ」

ミ、正ちゃんは、道の上をあちら、こちら歩いて、何か青か赤の珍らしい石が、落ちてゐないかミさがしてゐました。

ちい子ちゃんが、ゐなくなつて、正ちゃんが、一人の時です。こんぎは、髭の生えた小父さんが、煙草をぷか／＼吸ひながら、あちらから來ました。

「あの小父さんは、何かいふかしらん」ミ、正ちゃんは、お人形を直したり、タンクを置き變へたりしてゐました。

小父さんの靴音が、だん／＼近づきました。傍へ來るミ、果して、止りました。

「坊や、それは何だな？」と、小父さんは、きましました。正ちゃんは、かうきかれると、振向いて小父さんの顔をながめたが、さあ、何といつて、答へていゝか分かりません。

「坊や、何をこしらへたんだい」と、小父さんは、前より一層親しみ深く、やさしい聲で、もう一度きましました。正ちゃんは、いゝものを、面白いものをこしらへたのであるが、これを何といつて答へていゝか、自分にも分らなかつたのです。正ちゃんは、たゞ顔を赤くして、だまつてゐました。

「ははゝ、坊や、でたらめを造つたのか」と、小父さんは、笑つて、煙草の吸殻を捨て、行つてしまひました。

「でたらめ？」正ちゃんは、口の中でくりかへしました。小父さんに、さういはれると、たしかにでたらめだつたので、恥かしくなりました。もう、何となく、お山を飾る氣になれませんでした。正ちゃんは、ちい子ちゃんが、色紙と繪本を持つて、戻つて来る間に、お山をみんな崩してしまひました。

「あら、あら、正ちゃんさうしたの？」

と、ちい子ちゃんは、おきろいて、眼をまるくしました。

「でたらめだつて、小父さんが、いつたから」

「さこの小父さん？」

「お髭の生えた、小父さんが」

ちい子ちゃんは、大事なお人形さんについた砂を落し、庖丁や、組を砂の中から拾ひ上げてゐました。この時、はじめに通つた、ニコニコ笑ふ、頭の禿げたお爺さんが、反対の方向から、返つて來ました。

「おや、おや、お寶の島はさうした。えつ、なんで、あんないゝのをこはしてしまつたのだ。」と、お爺さんは、さも惜しさに、いひました。

「お寶の島、お寶の島、さうだ、お寶の島だつた。」と、二人は、顔を見合せました。

「自分は、名を知らないけれど、お寶の島を造つたのだ。小父さんに、さういつてやればよかつたな。」と、正ちゃんは、残念でたまらなかつたのです。

お爺さんが、行つてしもふと、二人は、もうそんなことは忘れて、また、別のことをして面白さうに遊んでゐました。うらゝかな春の日の午後でした。あちらの空は花曇か、霞んでゐます。

(をはり)